

英語の授業における子どもの動機づけを探る

—没頭する瞬間を追って—

齊藤 優 教職基盤形成コース

キーワード：動機づけ，没頭する姿，英語教育

1. 研究動機・目的

私はすべての学習において「動機づけ」が最も大切であると考えている。本実践研究では英語の授業における「動機づけ」に焦点をあてる。

1.1 現在のテーマに至るまで

大学3年次の教育実習Iでは、中学3年生の「先生、俺英語はテストできるけど授業は嫌いなんだ」という言葉から、生徒が英語の楽しさを感じることができるよう授業を構想したいと願った。英語の楽しさとは、実際に英語を使ってコミュニケーションを取ることであり、対照的に教科書を用いての活動は英語の楽しさを感じられないという意識があった。英語を使ってみたいと感じることができるようPower Pointや動画を毎回準備し、新出文法を使ってできる活動の考案に時間を費やし、子どもの関心を引き、楽しいと感じさせること、すなわち「動機づけ」を大切にしていた。私が2度目の授業実践を行った日の教科指導で英語科主任のK先生から「ICT負けないように」と指導があった。その日の授業を思い返すと挙手が多く、英語を使って活動している姿があり、英語の楽しさを感じている生徒がいたと感じており、K先生は生徒のどのような表情やつぶやき、姿を見てそう言ったのかずっと気になっていた。

この経験から大学院入学前に作成した研究計画書では「効果的な授業の動機づけ、その維持について」をテーマとした。1年次の夏の中間報告会では、授業観察記録やチーム演習での発表などのリフレクションを振り返り、自分の中で「動機づけ」を「子どもの活動が学習問題や学習課題に即していること」と捉えていたものが「子どもが疑問に思う姿や、何かに夢中な姿」に変わってきていたことに気づいた。

この捉えの変化から1年次の後期は「英語の授業における子どもの動機づけを探る—没頭する姿を追って—」をテーマに実地実習を行った。実習の中で、自分が中心に追っていたのは公立実習校2年K生であり、授業に没頭していない生徒であった。そのような生徒がどのような瞬間に英語の授業に没頭するのかを考えて、授業実践を行ったことから、副題の「没頭する姿」を「没頭する瞬間」とし、現在のテーマに至った。

1.2 研究テーマにかかわる研究問題とその意義

研究テーマに基づいて、研究問題を「生徒はどのような時に没頭する姿を見せるか」と設定した。この研究問題の重要性は、生徒が英語を学ぶ楽しさを感じ、前向きに学習に取り

組める授業や英語嫌いを作らない授業を教師が構築することに役立てることができるからであると考えた。さらに生徒自身が関心を持って英語の学習に取り組むことができれば、英語を生涯学び続けていくことができると考える。そしてそのような、生徒と授業を考えられる教師になりたいと思っている。すなわち、この研究問題を追究することで、授業において何がその子を没頭させるのかを明らかにし、生涯英語を学び続ける子どもの育成につながる授業ができる教師になりたいと考えている。

2. 観察者として、生徒が没頭している姿を見た授業

2つの実習校で観察した授業から、どんな時に生徒が没頭する姿を見せるかについて考えた。ここではF中学校の3年生を対象にした授業に取り上げ、考察したことを述べる。

2016年10月25日のF中学校で観察した授業では、*NEW CROWN SEIES 3* の Lesson 6 “I Have a Dream” GET part 2 が扱われていた。この Lesson 6 はアメリカの公民権運動（黒人差別）について紹介した内容である。その GET part 2 はアメリカ人の登場人物ポールが黒人女性ローザ・パークスさんの行動について紹介する場面である。内容はバスで白人専用の座席の近くに座っていたローザ・パークスさんが、バスが満員になり、運転手に席をゆずらないと警察を呼ぶと言われても No とやったというものである。授業の導入で、S先生はいきなり生徒たちに目の前で手を組むように指示を出した。そして資料を見ながら「右手が上の方は、将来お金持ちになって、幸せな結婚をして仕事では出世し、すべてがうまくいきます。左手が上の方はその逆です、頑張ってください」と言った。「やっぱり俺はうまくいくのか！」というS生や「うそ…」とうつぶやくY生の姿があった。その後で「あ、間違えた。逆だ、左手が上の方がすべてうまくいきます」とS先生が言うと、S生は一転して「え、まじか…」と落ち込んだ。そこでS先生が “It’s joke. How did you feel?” と問いかけると、「やっぱり自分はそういう人間なのかと思った」や「いい時だけは信じようと思った」という意見が出た。さらにS先生が “It is the same as colored people and white people” と続け、黒人奴隷の歴史についてのスライドで紹介し、教科書本文を読んでいった。1回読み終わったところで “She said No. So, she was arrested. Did she know that?” と聞くと、Yes と No に分かれ、No と答えた生徒からは「知っていたら言わない」という意見があがり、Today’s Goal が Why did she say No? と示された。個人でその理由をノートに書き出して、グループでノートを回して共有をした。

2017年度夏の間報告会で、このようにいくつかの授業観察から英語の授業において生徒が没頭する姿を見せるのには2つの条件があるとまとめた。第1の条件は魅力的な材が提示されたときであり、第2の条件は問いが自分ごとになったときである。その時私の考えていた魅力的な材とは、実際の映像や写真である。例えば、教科書に付属するキング牧師のスピーチの映像や、その人物の写真などで、それ自身に魅力があり、それだけで生徒の注目を集めることができるため学習に取り組ませるのに有効であると考えた。しかし、それだけでは没頭が維持されない授業もあり、没頭が維持されるためには、問いが自分ご

とになることが必要であると考えた。

ここで挙げた授業における魅力的な材とは、ローザさんが逮捕されると分かっているながら No と言ったという教科書本文であり、問いが自分ごとになったのは、黒人差別という言葉や歴史を知識として持っている生徒たちが、無意識に合わせた手の位置でどんな人間かを判断されるという黒人差別の疑似体験によって実は黒人差別を知らない自分に気づいたことではないかと考えた。このように他の授業からもこの2つの条件は何かと考えると「魅力的な材」は実際の映像や写真というよりも教科書本文にあることが見えてきた。

3. 授業者として生徒が没頭する姿を目指した授業

授業実践する際には生徒が没頭する姿を目指してきた。ここでは、F 中学校の2年生と対象にした授業を取り上げ、自分の振り返りから考察を述べる。

2017年10月6日に、F 中学校2年A組で *NEW CROWN SERIES 2 Lesson 6 “My Dream”* の USE Read を扱った授業を行った。Lesson 6 の USE Read は見開きの長文になっており、健がエンジニアになりたいという夢について2つの理由を自身の体験と共に語るスピーチ文になっている。

授業前の私は、教科書を何度読んでも楽しさが見出せず、どうすれば生徒が没頭するか、どうしたら読みたいと思えるか、自分の夢のスピーチが書きたいと思えるのか全く分からなかった。こじつけのように健はエンジニアになってどのようなロボット作りたいたのかを予想することで、生徒が読みたいと思えるのではないかと考え、世界のロボットを Power Point で紹介する場面を導入に設定した。Today's Goal は「健のスピーチの内容を読み取ろう」とし、活動として教科書を読んで感想を書き、友と共有することを位置付け、その共有から「健のようなスピーチを書こう」という Lesson Goal を設定することを計画した。

授業では、生徒とのやりとりが期待できるロボットの Power Point の導入で、自分が調べてきた内容を一方的に紹介する形になってしまい、生徒の関心を引きつけることができなかった。「健に向けて感想を書こう」と読みの活動に入ったものの、子どもたちが読み進めるための支援もなく、何人もの生徒が顔を伏せており、感想を共有しても「構成がしっかりしている」というものがほとんどで計画していた授業に至らない、だらけた授業になってしまった。そして、その日のリフレクションには次のように書いてある。

自分史上最低な授業であったと思う。インタラクションにならない、子どもが話す場がない、K 生は数学をしていたし、寝ている子も多数いた。根本的に何か違っていた。(中略) 健のスピーチを読むことに返る [教科書を読み返す] こともできず、内容理解もできていない、自分がやりたくないと思っていたことがよく分かった授業だった。[授業後のリフレクション] S 先生 [私の指導教諭] から「学び続けるモデルとして健が位置づくように」という言葉をもらい少しくリアになった。なぜ夢を語るのか、どうして2年生の今ここに My Dream なのか考えよう。Y 先生からは観察の質 [教師がなぜ授業の中でその指示をするか] についてご指導をいただいた。

この授業は自分にとって改めて授業をするとはどういうことかを考えさせてくれた。授業に関する技術的なことはもちろんだが、生徒にとってはたった一度の50分であること、その50分を自分のこのLessonで授業をやりたくないという思いから無駄にしてしまったこと、どうすればよかったのか、これからは生かしていかなければいけないと自分の中に刻まれた授業であった。

私は常に自分がやりたいこと、自分が面白いと感じることをそのまま授業で扱っていた。だからこそ、没頭する姿を生み出す第1条件に挙げた「魅力的な材」が生徒とは関係のない実際にある映像や写真であり、そればかりを考えていたため、この授業では材の魅力を見つけることができず、苦しい授業になってしまった。しかし、その授業のリフレクションをS先生、Y先生として、スピーチの構成よりも健の「人となり」を読み取ることができれば生徒たちも健のようなスピーチを書きたいと思えるのではないかと考え、教科書を読み込む中で、健は子どもの頃から好きなロボットに将来まで携わろうとしていることが分かり、健のスピーチは構成よりも健という人物を表していると感じた。これを2年A組の生徒たちと味わうために、健の情報を1年から3年までの教科書から抜き出し、時系列に並べると、子どもの頃から将来にかけて好きなことに携わろうとする健が可視化でき、これなら生徒も健の「人となり」を感じることができると考えた。そこで、導入でWhat kind of person is Ken?と問いかけ、出てきた情報を時系列に並びかえて提示する場面を設定し、自分たちの夢について以前書いたスピーチはどうか問い返すことを計画した。授業では、この教材研究をしたことで心に余裕をもって臨むことができ、生徒の発言を引き出すことができたと思う。この授業が今までの授業と違って充実していたと感じたのは、自分が感じた材の魅力（健の「人となり」が表れたスピーチ）をそのまま提示するのではなく、生徒にとってどうなのか、どう出会ったらその魅力を感じるのかという生徒にとってという視点から材を見て、教材研究したことにあると思う。

4. 研究のまとめと今後の課題

大学院の2年間で英語の授業における生徒の動機づけを没頭する姿を手掛かりに探ってきたが、一番に感じるのは、実践を通しての自分の教材観の変容である。これまでの自分を振り返ると、自分が面白いと感じたものをそのまま授業に持ち込めば、生徒も面白いと感じることができ、それが没頭する姿につながると考えていた。しかし、それが没頭する生徒の姿に重要なわけではない。目の前にある材のどのようなところに自分は魅力を感じて、生徒はその材のどんなところに魅力を感じるのかを考えたり、どう材を生徒に出会わせるかを考えたりすることで、生徒が没頭する姿、すなわち、英語の授業の「動機づけ」が生まれるのだと考える。

今後の課題は変容した教材観を持って授業実践と省察を繰り返し、生徒の動機づけを探り続けていくことである。生徒が英語を生涯学習したいと思えるような魅力ある授業ができるよう精一杯努めていきたい。